

(論文内容の要旨)

本論は「カドリ語 ―ボルネオ島のオーストロネシア系言語の記述―」を題目として7つの章から成る。付録として末尾に90ページの辞書と、小語彙集、学術用語の索引を含む。この小語彙集は本文7つの章の中で例示したカドリ語の語形を列挙し、語形毎に付した例文番号によって当該語形の例示箇所を参照できるようにして、語彙索引としての機能も果している。

カドリ語は、ボルネオ島の中央山脈の最南西部にのびるシュワナー山脈の南側に位置するカハヤン川上流域で話される。話者は25000弱と想定される。この言語はこれまで十分に記述されておらず、その文法の全体像は未だ明らかにされていない。本論は、これまでに断片的な記述しかないカドリ語の文法を全体的に記述することを目的としている。

第1章「言語と話者」は、この言語の類型的特徴と社会言語学的位置について述べている。ボルネオ島に分布するそれぞれの言語は、相当数が2つ以上の言語名で呼ばれ、カドリ語にも8～12の名称が見られる。この事実の解説を通して、本論がその記述の対象としている言語の分布域をさだめる。次に、言語類型論的な観点と歴史比較言語学的な観点から、カドリ語の特徴について概観する。言語類型論的には、(i) 音韻に関し、分節音、音節構造、超分節音的特徴などについて、(ii) 形態に関し、接辞添加、重複、繰返し、語類などについて、(iii) 統語に関し、名詞句構造や構成素順などについて概観する。歴史比較言語学的には、ボルネオ諸語の系統的親縁関係について述べた後、カドリ語が、オーストロネシア語族、マラヨ・ポリネシア語派、西部マラヨ・ポリネシア言語グループの中の西バリトに属することを確認する。また、カドリ語が話される地理的・社会的背景について、河川が交通の要をなすこと、2つ以上の家族でしばしば植物採集や狩猟・漁撈の成果を分けあうことなどを解説する。社会言語学的概観として、家族にガジュ語（威信言語）を母語とする者がいる場合、子どもはカドリ語より先にガジュ語を獲得すること、

いかなる宗教的行動においてもカドリ語は公式な言語とみなされていないこと、カドリ語は教育のための言語ないし文字化可能な言語とみなされていないことなどを述べる。これらの背景はカドリ語の衰退につながる危険性がある。また、先行研究の概略、本研究の目的と言語調査の詳細、表記法などについても述べられる。

第2章「音韻論」では、まず、最小対と異音を記述し、カドリ語の5つの母音音素、18の子音音素を設定する。母音音素目録には、水平の「前・中・奥」と垂直の「狭・中・広」の中に5母音がある。子音音素目録には、両唇、歯茎、歯茎硬口蓋、軟口蓋、声門の5つの調音位置と、閉鎖音、摩擦音、鼻音、ふるえ音、はじき音、接近音の6つの調音法の中に18の子音があり、声の有無の区別は閉鎖音系列のみに見られる。二重母音は音声的であるため音素目録に含まない。二重母音となるための3つの要件は、(i) 第二要素が狭母音、(ii) 第二要素が語末分節音、(iii) 韻律語は2音節以上、というものである。このほか、あたかも二重母音のように見える母音連続、「偽の二重母音」を記述する。さらに、母音・子音の分布を精査し、カドリ語において許される音節構造を確定する。音節構造はV、CV、VC、VV、CVC、CVVが可能である。音節が母音を核としてもつと同様、他のいくつかの音韻論的単位もなんらかの単位を核としてもつ。カドリ語に特徴的なのは、他の多くのオーストロネシア系言語と同様、韻律語が2つの音節を最小の単位とすることである。また、韻律語の拡張・音韻句・抑揚句・発話は、韻律語を最小の単位として行われる。続いて、カドリ語に見られるいくつかの接頭辞、接中辞、接尾辞の形態音韻的な交替を記述し、重複・繰返し、および借用語の音韻論的考察をおこなう。

第3章「語類」では、形態的・統語的分布に基づいてカドリ語の語類を定義し、語がどのようににはたらくか、どのような形式をとるかということを俯瞰する。そのために、形態的・統語的単位として、語、接辞、接語、基体を定義する。この章では、名詞、人称代名詞、動詞、形容詞、指示詞、数詞、助数詞、接置詞、助動詞、副詞、接続詞、疑問詞、助詞、間投詞の14個の語類を記述する。名詞は、指示詞による限定、複数性の標示、所有者の標示といった特徴が見られる開いた類である。時間名詞は、前置詞と共起することなく時間の付加部として機能し、副詞、形容詞、

指示詞などによって特定の時点やダイクティックな時点をあらわす。位置名詞は、モノの部分的な位置をあらわし、「部分をもつ全体」をあらわす語句が位置名詞の「所有者」として義務的に後続する。人称代名詞には自立形、接語形、接辞形があり、単複の区別、人称の区別、1人称複数の包括・除外の区別、所有形・形容詞による修飾が不可能、といった特徴が見られる閉じた類である。動詞は、項をとる述部として機能し、態をあらわす接辞が添加している、といった特徴をもつ開いた類である。非人称動詞、自動詞、他動詞、準他動詞、二重目的語動詞と分けて記述する。形容詞は、「最上」をあらわす接頭辞が添加する、比較構文や過剰構文をつくる開いた類である。形容詞を意味的に分類し、(i)空間的なひろがりをもつ寸法や規模をあらわすもの、(ii)空間的なひろがりをもたない物理的特性をあらわすもの、(iii)色彩をあらわすもの、(iv)ひろく人間の特性に関する事柄をあらわすもの、(v)年齢や新旧をあらわすもの、(vi)価値、良し悪し、道理に合致する程度をあらわすもの、(vii)速さをあらわすもの等を挙げる。前置詞、疑問詞、接続詞などがインドネシア語、ガジュ語から借用されているが、以下に挙げる語類は基本的に閉じた類である。指示詞は、語形によって名詞、副詞と同様に機能する横断的な語類だが、近称、遠称、談話照応の形式が、基本形－焦点形－様態形－縮約形のパラダイムをなす。数詞は10進法の閉じた類であり、接頭辞の別による回数形、序数形、集合数形の区別がある。数詞に関わるさまざまな構文がインドネシア語、ガジュ語から借用されている。助数詞は、一般的に言うと、意味特徴に基づいて名詞(句)を範疇化する類別詞の一種である。助数詞は数量をあらわす句をつくる点で他の語類と区別される。接置詞には前置詞と後置詞があり、これらはそれ自体で生起し得ないような、文法的に依存的な単位となる。助動詞は、モダリティやテンス・アスペクト、否定を標示する機能語であり、ふつう、述部に依存してそれ自体では文法的に自立しない単位となる。また、副詞も助動詞と類似の機能・分布をもつが、節末に生起可能な点で助動詞と決定的に異なる。疑問詞は、内容疑問文をつくるためにもちいられ、重複によって不定代名詞をつくる。助詞には、副詞的な助詞、量子子、関係的な助詞などがあり、それ自体では生起することがなく、文法的に語より

も依存的な単位となる。間投詞は、それ自体で一つの発話を構成し得るので文相当語と呼ばれることもあるが、接続詞によって接続され得ないという特徴をもつ。また、名詞が節の項とならない場合や、動詞が述部とならない場合について考察し、カドリ語では使用頻度の高い語彙に限ってゼロ転換がおこることをしめす。

第4章は、「名詞句」を題とする。節の中の名詞句は、典型的には (i) 項として機能するが、(ii) 単独あるいは前置詞とともに付加部となったり、さらには (iii) 述部として機能したりする。この章では、名詞句構造の中で主要部となる名詞、人称代名詞、指示詞、名詞句相当の関係節について、さらにその従属部となる各要素について、例とともに解説する。名詞句の主要部となる名詞は、一般名詞、地名・人名、時間名詞、位置名詞、派生した名詞に分けて解説する。一般名詞に顕著な特徴は、人称・数をあらわす所有の標識が付くことである。地名・人名は、量化の対象とならず数えることができない、所有の対象とならず所有標識が付かない、といった特徴をもつ。時間名詞は、時間を指定する副詞、形容詞、指示詞などと共起して名詞句をつくる。位置名詞は「部分」をあらわし、それを所有する「全体」の名詞とともに名詞句をつくる。派生した名詞は、生産的な接頭辞によってつくられ、抽象的な概念をあらわす。人称代名詞は、名詞を主要部とする名詞句構造とは違う構造をつくる。特に、複数をあらわす人称代名詞に限って、その直後に数詞などが後続して数量が限定され得る。指示詞を主要部とする名詞句は、最大の構造でも2語であり、名詞、人称代名詞を主要部とする名詞句に比べ、極端に小さな構造をなす。名詞句の従属部となるスロットには、数詞+助数詞、複数性を標示する助詞、連体的な量化子、所有者をあらわす名詞(句)や標識、形容詞や関係節などの修飾部、直示の指示詞、「さっきの」を意味する助詞、談話照応の指示詞が生起する。

第5章は、「付加部」を題とする。場所、時間、様態、頻度、媒介などの情報を与える付加部が、どのような単位や形式であられるのか、つまり、どのような語や前置詞がもちいられるかを記述する。空間の付加部には、場所、移動、空間的範囲、現場指示の表現がある。場所や移動、空間的範囲の表現には前置詞句がもちいられ、現場指示の表現には指示詞がもちいられる。現場指示のために前置詞と指示

詞がくみあわせてもちいられることもある。時間の付加部には、曜日・月名、年・日付、時刻、時間名詞、時の副詞、時間的範囲の表現がある。曜日・月名は主に借用語である。年・日付、時刻の表現は、「年」「日付」「時」をあらわす語彙と数詞のくみあわせによるものである。時間名詞は、副詞、形容詞、指示詞などとのくみあわせで「遠い未来」「近い未来」「現在」「過去」の時間があらわされる。時の副詞は節のテンス・アスペクト情報を補助的にあらわすことができる。時間的範囲の付加部は、形式的には副詞、時間名詞句、前置詞句であり、行為・過程や状態がどれだけの時間的な長さで持続するかという情報を与える。様態の付加部をあらわすことができる品詞や形態的手段には、形容詞、重複・繰返し、直示、副詞などがある。特に、直示の様態付加部は、指示詞の様態形、前置詞句、発話中の身振りや引用標識などでしめされる。頻度の付加部は、形式的には副詞、数詞を含む句、量子子を含む時間名詞句などによってしめされる。媒介の付加部は、道具・材料、基準点、比較、協力者などをあらわす。「媒介」とひとくくりにして呼ぶ理由は、行為・過程、状態などが間接的に顕現することをこの付加部があらわすからである。媒介の付加部は前置詞句によって表現される。この他、順序、対象、受益者、随伴、理由の付加部の形式についても記述する。

第6章「述部」では、節の中核部である述部として機能する、助動詞、動詞、形容詞、名詞（句）、人称代名詞、数詞、前置詞句の各用法を構文の具体例とともに解説する。否定の助動詞や、テンス・アスペクト、モダリティの助動詞は、単独で述部や節や発話となり得る。複数の助動詞が連鎖することがあるが、作用域の広狭によって順序が決まっており、前に置かれる助動詞の作用域の方が広い。動詞はとる項の数におうじて、非人称動詞、自動詞、他動詞、準他動詞、二重目的語動詞に分けられるが、この章では添加している接辞の形式によって分類し、解説を加える。ここでとりあげる動詞は、状態動詞（接頭辞が添加）、相互動詞（接頭辞が添加）、受動動詞（接中辞が添加）、動詞化接頭辞が添加した動詞、使役動詞（接頭辞が添加）、自発動詞（接頭辞が添加）である。それぞれの動詞は意志性、他動性の観点から用法を記述する。また、形容詞、名詞句、人称代名詞、数詞、通常は付加部と

なる前置詞句などは、単一項述部の主要部となり得る。これらのうち、最も多様な用法を見せるのは名詞句による単一項述部であり、等式構文、存在構文(前置詞とともに)、話題構文、名称の構文をつくる。

第7章は、「テキスト」と題し、カドリ語母語話者による代表的な民話テキストを提示する。本論の提示データの基盤となっている発話のテキストは、カドリ語母語話者の男性7人(若年、中年、老年)と、老年の女性2人による独話である。テキストのジャンルには、大きく分けて、(i) 民話や伝説、(ii) 歴史：オランダ統治時代のカリマンタン、マリコイ村、個人の生涯、(iii) 社会：家系、友、子、(iv) 人工物：舟、家、エンジン、(v) 自然：川、木、果物、(vi) 過去の体験、(vii) 日常の出来事、(viii) 未来の予定などがあり、その合計数は31、録音時間は合計で16.5時間である。この章では、これらのテキストから「ウコの物語」、「テプン・タジャヴン、漁をする」の2つのテキストに語釈、日本語訳をつけて提示する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、インドネシアボルネオ島(カリマンタン島とも呼ばれる)で話されているバリト諸語のうち、その中央山脈の最南西部にのびるシュワナー山脈の南側に位置するカハヤン川上流域で話されているカドリ語(話者25000弱)のフィールドワーク調査に基づく言語学的記述である。

バリト諸語は最近マダガスカルで話されているマラガシ語と系統関係にあることが証明され、比較言語学上非常に重要な地位を占めるようになっている。論者はこのオーストロネシア系の言語の中で、これまでまとまった記述がなかったカドリ語(ドホイ語とも呼ばれる)の現地調査を8回(総滞在期間5ヶ月)行い、いわゆる言語記述の3点セット(文法、語彙集、テキスト)を完成させた。

本論文は、この言語の音韻、形態、統語の記述からなる本文と、付録として、約2000の語彙をおさめた語彙集、本文中に使われた語彙に説明を加え語彙索引としての機能を備えさせた小語彙集、テキストからなる。

第1章は、この言語の言語類型の特徴、オーストロネシア系言語内での親縁関係について紹介し、さらにこの言語のおかれている社会的状況を記述している。またこの章ではカドリ語および周辺言語に関する先行研究の網羅的な紹介を行い、最後に言語記述の枠組みとして用いた言語理論と調査の方法を述べている。

第2章は、音声・音韻を扱っている。ここではこの言語の音素目録を最小対の存在、条件変異により確定し、重要な音交替の規則を議論している。この章での重要な発見は母音連続と音節構造の関係である。論者はカドリ語の母音の連続をその振る舞いの違いから、同一音節内で二重母音を形成するものと、音節をまたがり母音の連続を形成するものの2種類に分けている。さらに、二重母音を形成するものの条件を一般化し、韻律語が2音節からなるという条件とあわせると二重母音の生起する位置は音韻的条件で予測できることを示している。この一般化により、この言語の音節構造を非常に緻密な議論によって確定することに成功している。また、こ

これらの記述的一般化により、これまで文字をもたなかったこの言語に対し、音韻論的に整合性のある正書法を提案することを可能にしている。

第3章は語類を扱い、厳密な統語的、形態的分布の観察を通じて、この言語の記述に必要な十分な語類を設定している。論者は一般言語学的見地から、語、接辞、接語、基体などの記述単位を設定し、それらの組み合わせからなる品詞類、品詞の下位類の分類を行っている。これらの分類は、厳密な記述的一般化を背景にしており、それぞれ明示的な分布的根拠を持ってなされている。

第4章は名詞句の記述、第5章は付加部、第6章は述部を扱っている。この3つの章はこの言語の統語論に相当する部分で、論者は3章で認定した語類がどのような構成をなして、項となるのか、付加句となるのか、述語句となるのかを、実に綿密に記述している。同時にこれらの章では、名詞句の統語的な分布に基づく下位分類、関係節、助動詞類のスキームの違い、アスペクト構造、態などさまざまな構造が網羅的に扱われている。

第7章は論者が収集したカドリ語母語話者による民話テキスト資料から2編を選び、語釈と翻訳を提示している。

この論文には、付録としてカドリ語辞書、小語彙集という二つの語彙集がついている。後者は本文に用いられた単語のすべてをアルファベット順にならべ、例文番号を付した語彙インデクスで、前者は、論者がこれまで調査で収集した単語に、例文をつけ、語釈、例文訳を、英語とインドネシア語でつけた辞書である。また、必要と思われる場合には絵や写真がつけられている。この辞書は大変な労作で、これまで文字記録をもたなかったこの言語の母語話者から有益であると感謝されており、この言語の保存、維持に貢献するところ大である。

カドリ語は、いわゆる消滅の危機に瀕している言語のひとつである。現地社会では、威信言語であるガジュ語、共通語インドネシア語の使用が意思疎通、学校教育、宗教集会、文書等において不可欠であり、母語話者は自分の子供達に威信言語を優先的に習得させているため、急速に存続の意義を失っていた。このような危機的状況にある言語を記述することは、言語学の課題の中でも急を要する課題の一つであ

り、論者が辞書を含む詳細な記述を残した意義は非常に大きい。

しかし、なお不十分な点も散見する。カドリ語辞書と小語彙集は時間を隔てて書かれたため、記述に一部食い違いが生じている。本文中に使用された単語や用法がカドリ語辞書に掲載されていないものもすくなくあつた。さらにテキストも収集した資料のうち2点のみを掲載するにとどまり、量の点で多少物足りないと感じられる。この2点に関しても、録音資料が添付されていないことも不満が残る。しかし、これらはすべて容易に修正し、補うことができるもので、決して論文全体の評価を損ねるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年8月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。